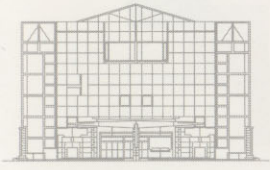


The Membership of the National Museum of Modern Art, Kyoto



京都国立近代美術館 友の会会報

2005
WINTER
第7号



須田国太郎 ^{やまんば}山姥 1948年 グアッシュ・紙 京都国立近代美術館蔵

展覧会の



見どころ

特別展

須田国太郎展

11月1日[火]—12月18日[日]

休館:月曜日

須田国太郎展について

京都国立近代美術館では、1981（昭和56年）に開催されて以来、24年ぶり2度目となる大規模な「須田国太郎展」が開催の運びとなりました。

今回の展覧会では、特に洋画家・須田国太郎の足跡を前面に押し出そうと、油彩画を126点集めていますが、これだけの油絵作品が並ぶのは、須田展としてもはじめてのことです。そして須田は、19歳の第三高等学校在学中に独学で油絵を描きはじめましたが、同時に金剛流の高岡鶴三郎に師事して謡曲を習い、「能・狂言」の世界にも生涯深い関心を寄せていました。さらに須田は、生涯6000点にもおよぶ「能・狂言」の鉛筆デッサンを、およそ100冊のスケッチブックに残しています。そこで本展では、この事実注目し、「能・狂言」という独立した一章を設けて、ご子息の須田寛氏より大阪大学に寄贈された5000点の「能・狂言」デッサンのうち、代表的な作例を選び紹介しています。

須田国太郎は子息寛氏に、半ば冗談のように「自分は能はものになったが、そこへ行くと絵の方はまだまだものになっていない」とさえ語っていたといえます。実は今回、須田の「能・狂言」デッサンにも光をあてることで、須田にとって、あるいは絵を描くことにとって、その生涯を貫いた「能・狂言」とのかかわりがどのようなものであったか、ということにも思いをはせていただけるでしょう。

須田の絵画を語るとき、色彩面については、影響を受けたバロック絵画の明暗対比との関連が重要であることはいうまでもありませんが、他方、形態面での構成要素となる線描については、おそらくはその「能・狂言」のデッサンへの観察も欠かせないと思われます。須田絵画には、鳥や動物といった「動的」モチーフも数多く取り上げられ、そうしたモチーフの決定的なポーズを描きとめる上でも、「能・狂言」デッサンは大きな役割を果たしていたとも思えるか



須田国太郎 犬 1950 東京国立近代美術館蔵

らです。そして洋画や西洋美術に造詣が深く、それと同じくらい「能・狂言」などの古典芸能についても詳しい人たちが、これまでとまったく異なった角度から、須田国太郎の作画姿勢の本質を解明してくれるかもしれません。その意味でも須田芸術は、まさに洋の東西の境界領域に位置しているといって過言ではありません。

最後に私事で恐縮ですが、私が今も大切にもっている中学時代の美術の教科書には、執筆者のひとりとして、須田国太郎の名が記されています。昭和四〇年初版の日本文教出版の教科書ですが、京都美大の学長代理の要職にもあった、これは須田最晩年の仕事のひとつとなっています。須田独自の油彩画作品をとおして、その背後に潜む「能・狂言」への傾倒の姿や、さらには教育者としての須田国太郎の側面など、新たな須田国太郎像についても、今回の展覧会からぜひ見つけだしていただきたいと思います。

山野英嗣（京都国立近代美術館主任研究官）

南禅寺草川町

須田国太郎の作品を見ていると、動物や鳥を画題にしたものが多くあることに気付く。豹、縞馬、駝鳥、鷺、犬鷲等、取材の場所が判るものも多い。須田は美学会、美術史学会、講義、講演など学究らしい機会を通して、また時には、保養や友人たちの誘い、招きにも応じて、実にまめに日本各地を旅行しているが、花鳥は主に、自宅の辺りで取材していたようである。須田は京都中京（誕生当時は未だ上京区だったようだが）の生まれで、生涯京都を離れなかったが、中年以降は京大に勤めた関係もあったのだろうか、川東（鴨川の東）に移り、昭和5年（1930）には洋画家津田青楓のアトリエの在った鹿ヶ谷に、そして昭和14年以降は亡くなるまで南禅寺草川町に住んでいた。この会報の第4号でも紹介したように、この地は動物園にも、美術館にもきわめて近い所である。動物園については、すでに書いたのでここでは述べないが、須田にとっては、一寸珍しい鳥や動物を写生できる格好の場所であった。同じ草川町には、朝粥で有名な「瓢亭」があるが、この座敷とご馳走を描いたのは川端龍子の「佳人好在」（1925）。しかし、龍子には珍しく、静かな風趣のこの作品は、当時の院展の、小じんまりとした、上品な世界に安住する傾向にスポイルされた作品として龍子自身が評価せず、院展と決別して「青龍社」を立ち上げるきっかけとなったものであった。

さて、草川町を北へ辿ると、臨済宗総本山の南禅寺。この堂々たる風格のお寺は、鎌倉時代、禅の京都五山と称された寺々の上に置かれ、威勢を誇ってきた。多くの塔頭（たっちゅう）を擁しているが、その一つ、金地院（こんちいん）には、京都近代洋画の礎を築いた浅井忠の墓がある。また、田村宗立、東京の小山正太郎、原田直次郎などに師事、帰洛後は画塾鐘美会を開き、後には西下した浅井忠と協力して関西美術院を設立して、京都の洋画の黎明期を支えた伊藤快彦（いとうやすひこ）は、南禅寺のすぐ北東に位置する若王子（にゃ



瓢亭附近



伊藤快彦 厨の春 1895年頃

こうじ）神社の神官の家の出身であったが、質朴な筆で、薄暗い厨で夕餉の準備をする若い女性を画いている。厨は南禅寺塔頭正の院（しょうてきいん）、若い女性は快彦の新妻がモデルと言われている。正の院は湯豆腐を食べさせる店として、知られている。

大正12年の関東大震災は、さまざまな分野の人や文化を、上方に一時避難させたが、岸田劉生もその一人として、京都へやって来た。大正12年10月のことである。大正15年の3月には鎌倉へ転居しているので、二年弱の僅かな歳月だが、この間、あまり目に見える果実がないとして、研究者の間では評価に迷いがあり、人によっては無視することもある。しかし一方では、日本画を試みたり、中国宋元花鳥画の収集や初期肉筆浮世絵の収集などを通じて新しい摸索がきざしはじめた時期でもある。人との交流の賑やかな人なので、京都の学者、幾人かの画人、柳宗悦をはじめとする『白樺』の同志などなどの交流はあるが、夜は祇園に通う放蕩な生活が続いた。草川町の家から祇園町までは、人力車ならせいぜい15分程の近さ。贅沢な程の風光明媚に一瞥も呉れず遊び明かす劉生は、京都であるいは、不健康と精神的動揺を手に入れてしまったのかも知れない。（R.K.）

コレクション・ギャラリーの小企画

10月25日(月)―12月4日(月)

ポール・クローデル展

大正末から昭和の初期にかけて駐日フランス大使を務めたポール・クローデルは、20世紀のフランスを代表する詩人でもありました。本年はクローデルの没後50年にあたり、フランスだけでなく、日本でも記念行事が行われましたが、詩人が滞日中、親交を結び、詩画集を共同で制作した富田溪仙をはじめとする、京都の日本画家の作品を、詩人の資料と共に展示しています。

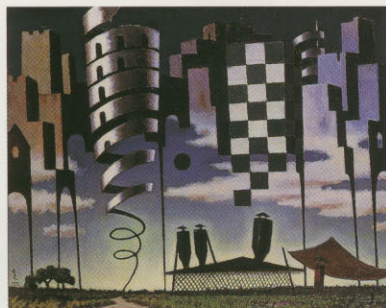
11月8日(火)―12月25日(日)

京都独立美術協会の画家たち

独立美術協会は昭和5年11月に結成され、二科会や1930年協会と肩を並べる先鋭な制作活動を展開しましたが、昭和8年には「独立美術京都研究所」が開設されて、須田国太郎が、

田中佐一郎とともに、

講師に招かれ、会員として作品を発表するようになりました。今回は「須田国太郎展」にちなんで、京都独立美術協会に加盟し、活躍した画家、北脇昇、小牧源太郎、川口軌外、里見勝蔵、小林和作、今井憲一、安田謙の作品を展示します。彼等が独立展に出品した作品だけではなく、コレクションの中から彼等の遺作を数点ずつ選んでの展示です。



今井憲一 晷 1975 京都国立近代美術館蔵

いずれも、月曜日は休館です。(文責・加藤)

友の会の催し

芸大生によるクリスマス・コンサート

平成17年(2005)12月17日(土)午後6時開演

去る10月15日(土)に行われた第二回のコンサートは、午前中の悪天候の影響もなく、大変盛況でした。日刊紙上にも取り上げられ、ようやく、このコンサートも定番になりつつあるかと、喜んでいます。それにつれて、もう少し余裕と落ち着きを取り戻したいものです。さて、今年最後のコンサートは、早めのクリスマス・コンサートとなる予定です。曲目は、

ヴィヴァルディー:合奏協奏曲(四季)より、〈冬〉〈春〉

バッハ:クリスマス・オラトリオより

バッハ、グノー、シュウベルトほか:〈アヴェ・マリア〉

管弦楽だけでなく、声楽の学生も参加の予定です。入場無料、雨天決行は前2回通り。定員は100名。友の会の方は前以って予約できます。ハガキに会員番号、同伴者数、住所・電話番号等が変更の場合は、それをお書き添え下さい。締め切りは

12月13日(火)。但し、当日開演の午後6時までに、必ずご着席下さい。それを過ぎますと、予約が取り消されますので、ご注意下さい。

友の会会員証の使用について

企画展や特別展にご入場の際、入口で会員証に捺印いたしますが、これは、その展覧会への会員証による入場は一回のみという意味で、別の企画展では再度ご使用いただけます。また、同じ企画展を二回以上見たい場合は団体料金となります。常設展は制限がありません。

次回展予告

ドイツ写真の現在―

かわりゆく「現実」と向かいあうために

2006年1月6日(金)―2月12日(日)

(1月9日をのぞく毎月曜日および1月10日(火)は休館)

- 開館時間
午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
 - 夜間開館
4月15日(金)―9月2日(金)までの企画展開催中の金曜日
午前9時30分～午後8時まで(入館は午後7時30分まで)
 - 休館日
毎週月曜日(月曜日が休日に当たる場合は、翌日が休館)、
及び年末年始
(開館時間、休館日は臨時に変更する場合があります)
- ※お車で越しの場合 岡崎公園駐車場(地下)をご利用の有料入館者は、駐車場の割引(1台1名)を受けられますので、駐車券をお持ちの上お越しください。

● 交通案内



独立行政法人国立美術館

京都国立近代美術館

The National Museum of Modern Art, Kyoto

〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町
TEL. 075-761-4111

テレフォンサービス 075-761-9900
ホームページ <http://www.momak.go.jp>